OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小田嶽夫の上海体験と認識の変化
Author(s)	何, 問民
Citation	日本語・日本文化研究. 2021, 31, p. 22-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85212
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

小田嶽夫の上海体験と認識の変化

何　問民

はじめに

小田嶽夫（1900―1979）は、中国杭州での経歴を題材にした作品「城外」で1936年の第三回芥川賞を受賞し、合計四回中国へ渡って中国と関連する作品を大量に書いた作家である。受賞作の「城外」以外に、魯迅や郁達夫の研究者としても注目されている。しかし、「城外」後の中国体験と作品や、作家としての小田及び文学史的位置付けなどに関して、論及されることが少ない。本稿は小田の2回目の中国訪問、1937年3月から4月にかけて一ヶ月程上海に滞在したときの体験に注目する。

小田の上海訪問についての研究は少ない。例えば、『戦時上海のメディア』という上海の雑誌新聞の研究書の中で戸塚麻子は、小田がビルマに従軍する前（1940 年）に上海の『大陸新報』に連載した小説「黄鳥」を論じている。小田の思想の揺れを説明した戸塚は、『大陸新報』文藝記事の持つグレーゾーンの一端を明らかにすることを目的にしている(1)。「黄鳥」は3回目の中国訪問（1939年北京・満洲）後の作品であり、戸塚は小田の1937年の上海体験については触れておらず、他の上海関連作品も分析していない。上海旅行後の作品「泥河」（1937年10月）と「さすらひ」（1937年11月）についての研究は、松本和也「日中戦争開戦前後・文学（者）の課題――小田嶽夫「泥河」・「さすらひ」」のひとつしかない。松本は小説「泥河」と「さすらひ」への当時の評価と評論を通して、事変に対する文学者・文学雑誌・文壇の態度を論じている。「泥河」は当時、報告文学、戦争文学として見られ、「さすらひ」は事変の影響が反映した作品と目されつつも、「際物」ではないという点で一定の評価を得たことを論じた。しかし、小田の上海体験や作品の内容に関してあまり触れていない。

稿者調べた限りでは、小田は1937年3月に上海を訪れてから1939年5月に北京・満洲を訪問するまでの間に、エッセイと小説あわせておよそ58篇(2)の作品を創作し、随筆集『支那人・文化・風景』（1937年11月、竹村書房）と小説集『杭州城図会』（1938年1月、版画荘）を出版した。この時期の小田の文学活動と様々な事柄に対する認識などに関しては、断片的に知られているのみで整理がなされていない。

それで、上海旅行で何を体験したのか、中国及び中日関係に関する認識は変化があったのか、といった疑問が生じる。本稿では、エッセイを中心に小田嶽夫の上海体験及び対中認識を中心とする認識の変化を明らかにする。

１．上海に行く時の小田の身分認識

1937年3月、小田は作家の永松定と上海へ行き、4月まで1ヶ月ほど滞在した。この2回

目の中国訪問、いわゆる上海旅行は1回目の中国訪問（杭州時代）と本質的に差異がある。以下の表1は二回の中国訪問を比較したものである。

表1　杭州時代と上海旅行の小田の状況の対比

	身分	目的	経済状況	文学との関係	中国との関係
杭州時代（1924～1928）	国家公務員	杭州領事館で勤務	給料が貰える。	作家を目指して出発する時期である。	赴任する前に、「三、四年も日本を離れることは、自分の文学修業に不利だと思って、私は大へん悩んだ」(3)と不安を記した。
上海旅行（1937）	一般観光客	創作素材の収集と翻訳の問題解決のため	芥川賞受賞を通して、辞職による極端な貧乏から抜け出し、経済的に余裕がある。	作家という身分が確立できた。	「城外」という中国要素に満ちた作品で受賞し、「支那通」(4)作家として見られている。

表1で示したように、「上海を舞台にした小説を構想」するため、また改造社から出る「大魯迅全集」の「両地書」の翻訳で許広平未亡人を訪ねるために(5)上海へ旅に出た小田の気分は、杭州時代と大きく違った。

小田が上海の土を初めて踏んだのは1924年である。杭州領事館に書記生として赴任した時は上海経由で、その時は「焼け焦げているような」(6)上海の町へ着き、一晩泊まって、翌日杭州へ出発した。勤務の間に上海にも何度か行ったが、上海を見るより、「友人を訪れ」に出かけたのであった。杭州で勤務していた小田は上海に関して特に興味がなかった。1937年の上海再訪問は「初めての旅行のやうな新鮮な気持ち」(7)で、色々なことを期待しながら気軽に上海を見ていた。

最も注意すべきことは国家公務員という公的身分から一般観光客という私的身分に変わったということである。つまり、小田の上海体験は身分転換後の中国体験である。さらに、文学の面から見ると、単なる文学好きな青年から正式な作家となっていた。小田は自分でもこの「身分」について意識している。戦後の著作であるが、『文学青春群像』の中で郁達夫との交際を記すときに、「身分」による不便について吐露している。

私は領事館勤務時代には、こちらが、相手の中国人にいかほど好意を抱いていても、自身が中国を侵略する日本帝国機関の一員である身分はどうにもなるものではなく、先方が心の紐を締めるのを怠らない、という場合をしばしば経験した。そしてその先方の気持の反映から、こちらも天真爛漫にはなり切れないもどかしさを、その都度味わされた。（「郭沫若と郁達夫」「暴風雨前夜」『文学青春群像』南北社、1964 年、p. 207）

中国人と友好的に交流したいという願望を持っていても、「日本帝国機関の一員」という身分のために失敗することがあった。小田は「身分」によって自分の行動と視点の違いを表し、中日の間にいる自分の位置について考えていたと見られる。1928 年に杭州から帰国し、1930 年に外務省を退職した小田は、現在「日本の官吏でなく」(8) なったが、日本で再び中国人の郁達夫と交流する機会があり、「どこまでも国境を超越した一人の人間と人間の」(9) 交流ができることに期待を持っていた。郁達夫と順調に交際し、中国人と友好的に交流することに成功した。その続きとして、1937 年の上海訪問の目的の一つは、「現地の人」(10) と交流することであった。

一方、中国を舞台にした小説「城外」で有名になった小田は、作品の中国要素が評価された点である、いわゆるセールスポイントであることを意識していたはずである。小田三月の著作目録(11)から見られるように、芥川賞受賞後、中国と関連する作品の数は明らかに増え、中日関係への関心も高まってきたのだろう。例えば、「抗日教科書」というエッセイでは、中国の教科書における「抗日」要素に注目し、日本側は中国と日本の友好のために努力すべきだと言っている(12)。小田は中国と日本の友好的な関係にも期待していたのである。

しかし、上海での実体験は、上海へ行く前に中日間の友好交流という素朴な望みを持っていた小田に大きな衝撃を与えた。以下、上海で何を体験したのかを具体的に提示したい。

２．「暴風雨前夜」の上海体験

戦後に小田が前半生を記述した『文学青春群像』では、1937 年 3 月の上海旅行を「暴風雨前夜」という章に収録している。「暴風雨前夜」という題目は、破壊力のある「暴風雨」が来る直前の緊張する雰囲気を暗示し、正確に当時の時局を表している一方、衝撃的な上海体験のまとめでもあるだろう。

２．１．享楽の国際都市の体験

上海にいる小田はよくホテルの窓から上海の街を見ながら、上海の核心について考えていた。その答えは、小田がロシア人経営のビアホールで、中国人、英国の水兵、エジプトの占い師、ロシアの女中が同じ空間にいる場面を見た時に出て来た。その場面は、「縮図」(13) として、「国際都市、世界人の寄り合い所」のような上海を反映していた。

雑誌『海運』で、1937 年 3 月 10 日から 3 月 27 日にかけての上海旅行の日程を記した日

記が、「上海日記」という題目で同年 4 月から 6 月までに三回にわたって連載された。その「上海日記」から見ると、ダンスホールや映画館、淫売窟、「大世界」などの享楽の場所に、小田は日本人の友人と一緒に 10 回以上行ったことがあった。それ以外に喫茶店や酒館などには毎日数回行っていた。小田の上海旅行を記したいくつかのエッセイの中にも、各国の娼婦、日本人に偽装する嘘つきの中国人、媚を売るロシア人の店主などもよく出てくる。一般日本人観光客が目にすることのない、刺激的な「猟奇な面」(14) を読者にも見せている。例えば、ある日の夜に道端で出会った中国人男性に誘われた小田は「磨鏡子 (15)」を見た。「それから先きはもう書くまい」と小田は筆を止め、「とにかく僕は図らずも上海の最も醜怪な場面」をのぞくことができたが、「嫌悪感を覚えただけであつた」(16) と評価している。また、朝鮮人の娼婦達を「汚らしく、動物が人間の着物をまとつて」(17) いるように書いている。外国人だけではなく、上海にいる日本人に対しても不満を漏らしている。飲食店で出会った日本海軍陸戦隊の水兵の群れの言動に対して「甚だしく不愉快であつた」(18) と記している。上海に生活している人間は「醜怪」な「動物」になったり、周りの人を「不愉快」にさせる言動をしたりする。小田はそれらの都市の暗部、及び暗部の人達も見ている。

西洋文学で、上海を「a chaotic and unrestrained wilderness in terms of morals」として描くことが多い (19)。小田もそれに同意するだろう。上海は「国境を全然超越した、嘘のやうになごやかに楽しい」(20) 都市であるが、その裏に人間を堕落させやすい魔都の面もある。小田は上海という享楽の国際都市の両面を体験した。

２．２．風物の体験――上海の河

上海は沿海都市で、黄浦江及びその主要な支流、上海の共同租界に住むと日常渡らずにはいられない蘇州河やその他の小さな支流と揚子江などの河が多く存在する。これらの河も上海体験の重要な部分である。

小田にとって、黄浦江は「上海独特の興味深い騒然たる風景」を作っている。蘇州河も「水が泥色な上にいつも薄汚い荷船に氾濫されている」が、「単に共同租界だけでなく、上海市街全体を二分する河」であり、「騒然、雑然とした、まとまりなく、落ちつきない」上海の街の「色彩を柔らげ、風致を添へるには大きな役割」を果たしている (21)。

エッセイ「濁った水」の中では、小田は河を見て、「一見した瞬間にただもう茫漠として底知れない感じ」に襲われ、その流れを自分の心情にも結びつけている。

> 初めて支那へわたつた際にはその滔々たる濁水からどうにも抵抗しがたい圧迫のやうなものを覚えて、何かしら焦燥に似た気持ちに悩まされたのを覚えているが、今春十年ぶりに上海へ遊んだ際には、自然に心が濁水に溶け込み、一種の悠揚とした気持ちになつてゆく心の楽しさを味はつた。(「濁った水」「文学者の見た支那」『新潮』1937 年 10 月号、p. 31)

もちろんこれは二回の中国訪問の異なる目的に関わるが、この文章から、中国の「濁水」に関する二つのイメージが見られる。「濁水」は小田に想像や感情を与えた一方、小田の心理も反映している。

引用のように、前に上海の河に底の知れない未知や抵抗しがたい圧迫という否定的な印象を持った小田は、今回の上海旅行を通して、都市に輝きをますものや悠揚たる心情をもたらすものという肯定的なイメージに一新した。上海体験後、「泥河」・「濁った水」・「濁水」などは上海の河を指す言葉として、作品でよく使われる単語になった。上海の河に関することは小田にとって重要な体験であったと見られる。

２．３．戦争の間接体験

上海訪問の前、杭州時代の時に、小田はすでに戦争を少し味わったことがあった。1927 年２月、小田が杭州から日本に戻る前年の軍閥孫伝芳と蒋介石を総司令とする国民革命軍との戦いは、日本の杭州領事館にも影響を与え、杭州領事館は上海の租界へ移った。この事件が小田に与えた「ショックは大きかった」(22) が、中国と日本の直接的な衝突ではないため、それは第一章で示したように中日間の友好交流という素朴な期待に影響しなかった。

そして、1932 年に上海で第一次上海事変（中国側では「一二・八」事変と呼称される）が起こり、上海共同租界で中国軍と日本軍の衝突による大激戦があった。上述の「上海日記」からは、小田が上海事変に関心を持っていたことがわかる。

> （3 月 13 日）二時半又上海毎日へ出かけ、午前中に頼んでおいた上海事件當時の新聞を見せてもらふ。五時頃まで要点を筆記する。
> （3 月 14 日）……K 君の知り合いの M 氏宅を訪れ、上海事件当時の話を聞く。
> （3 月 19 日）……上海毎日新聞社へ寄る。……新聞を少し見せてもらって帰る。
> （3 月 21 日）……K 君の家へ行く。晩飯を御馳走になり、その後で上海事件当時の話を可なり細かく聞き、ノートを取る。…（「上海日記」「上海日記（其の二）」「上海日記（其の三）」『海運』1937 年４月号、５月号、６月号より抜粋。）

引用で示したように、小田は第一次上海事変の状況に関心を持ち、色々調べていた。第一次上海事変の時、日本側の戦死者は 769 名、負傷 2322 名である。中国軍の戦死者は 4086 名、負傷 9484 名、行方不明 756 名である。中国側住民の死者は上海市社会局が 3 月 6 日に 6080 人、負傷 2000 人、行方不明 1 万 4000 人と発表した (23)。それらの悲惨な状況は小田が見た新聞にも反映していたであろう。さらに、3 月 15 日に小田は戦場跡を見に行った。「戦ひの後未だ復旧せず、荒涼たるものあり」(24) と記している。また、見た戦場跡について次

のようなことも記している。

> かう書いてくると、知らない人にはここは如何にも歓楽場らしい華やかな地域に映りさうでもあるが事実は昭和七年の上海事変の際焼失したオデン座跡その他の消失区域は今に索漠たる空地のままに遺棄されて居り、徒らに支那人の子供等の凧揚げ等の遊び場所に化している。(「憶ひ出の上海」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 73)

小田は戦争の場面を直接見ていなかったが、新聞を読んだり体験者の話を聞いたり戦場跡を見たりして、戦争の悲惨さを間接的に体験したのである。

２．４．中国民衆の濃厚な排日気分

中国人民衆の日本人に対する態度に接したことも、上海での重要な体験の一つである。文章の中で、上海で見た中国人民衆に注意を払っていた。上海のホテルへ落ち着いた最初の日のことで、小田は出会った中国人のことを記している。

> 休憩室で電話をかけたところ、話し中なので、その前にそのまま立っていると、廊下のほうから、背広服姿の中年の中国人がつかつかとやって来、いきなりひったくるように受話機を取った。その表情、動作には、明らかに私に対する激しい敵意――いや侮蔑があった。(「上海行」「暴風雨前夜」『文学青春群像』南北社 1964 年、p. 225)

また、二、三日後の夜、小田はホテルの近くの電車通りを歩いている時に「背広を着た日本人と中国人の車夫」が争っている場面に行き会わせた。

> 車夫の猛々しい声を聞いて、二三人の中国人の通行人が立ち止まったが、彼等のその日本人を見る目は憎悪に燃えていた。(中略) 車夫は去って行く日本人の背中へ「ヘン、日本鬼子めがっ！」と、唾するように憤りを投げつけた。(「上海行」「暴風雨前夜」『文学青春群像』南北社 1964 年、p. 211)

さらに、上海のバスや電車の中では、欧米人が「さかんに鳥のように囀っている」のに比べて、「日本人は誰一人喋るものとてはなく、隅のほうに隠れるようにひっそりとなり、暗く目をぎょろつかせている」[(25)]。小田は上述の事実、つまり「中国人市民の抗日気分の想像以上に濃厚だった」[(26)] ことに驚いた。

1845 年に上海租界の『土地章程』が修正され、都市化に伴って大量の外国人が殺到した。上海は完全に現代的な都市である。大量の欧米人は上海を改造し、この都市は西洋化、工業

化した。上海の経済は急速に発展し、大量の外国人がお金のために上海に殺到する。1931 年に人口は 6 万人を超え、1942 年に上海の外国人数は最多の 150931 人になった。1910 年以前、上海にいる外国人はイギリス人がメインである。1915 年以降、日本人が一位になり、1942 年、日本人の人数は他国人の総合人数を超えた[(27)]。しかし、1931 年の満州事変以来、上海を含め、中国の各地域で排日運動が盛んになった。1932 年の第一次上海事変の後、軍事衝突に続いて中日民衆間の衝突も激しくなり、上海での日本居留民の日常生活にも影響があった。短い期間で上海を訪問した小田が体験した排日・抗日はその一部分のみである。排日状況についての感想を次のように記している。

> この時期には中国人の抗日意識がものすごく強かった。（中略）中国人の対日意識が極度に悪化したのであった。電車の中でもバスの中でも、日本人は人目に立たぬよう、声も立てず、ひっそりとしていたが、これ程の状態になっているとは私は夢にも思っていなかった。（「人生を作る」『三笠山の月』小沢書房、2000 年、p. 37）

さらに、「もう日中間の関係が収拾のつかない土壇場まで追い詰められている」[(28)] と書いているように、小田は中日関係の極度な悪化を痛感したのであった。

２．５．中国人知識階級との交流

民衆との友好交流が失敗してしまったとはいえ、小田は中国人知識階級とは友好的に話すことができた。3 月 26 日に小田は永松定、鹿地亘夫婦と共に魯迅夫人を訪問し、評論家の胡風と夫人、作家の蕭軍と蕭紅夫婦、日本文学の翻訳者の黄源夫婦と交流した。魯迅家で見た魯迅の文字や魯迅の家族と知り合いの様子を通して魯迅への理解が深まった一方、上海での中国人知識階級との交流も上海体験の重要な部分である。

その時、特に小田の注目を引きつけたのは魯迅夫人や蕭紅などの中国の女性知識人であった。「始終明朗闊達」で、日本のモダン婦人が持っている「世紀末的イグノラント」から隔たった「自然な、健康な、潑溂味」があると評価した[(29)]。永松定と話し合う時に、「始終明朗闊達」の原因を、従前の「極端に玩弄物視され、転じて貴重物視される」ことではなく、欧米伝来の女性尊重の風潮と結びつけていた[(30)]。

1936 年に小田は、中国の青年たちの「悲観懐疑」、「無希望の底にうごめく」状態を描いた、茅盾の『動揺』と『追求』を翻訳した。その小説の内容と当時の情勢から推測して、小田は中国のインテリゲンチャ青年たちが政治で「悲観、絶望の淵へ落し込まれている」と思った。上海で作家、インテリゲンチャ青年たちと親しく接してみると、予想と「逆な状態」で、青年たちは「意気情熱」を持っていることに驚かされた[(31)]。そして、中国人の「意気情熱」の動因を探究し、小田は彼らの「反日救国」的精神を挙げた。その精神の反映例として、中国人知識階級の青年で、上海に来る前に小田が日本で日本語指導をし、今回の上海訪

問で再会した「支君」(32) を挙げている。

日本にいる時期にその青年は酒やダンス、麻雀など、「一切の娯楽には手を出さず」、交友も無く、写真という「科学的な高尚な」趣味しかなかった。「支君」の「熱心さ」を理解できなかった小田は、上海での中国人知識階級との交流を通して、「支那の青年は余程真剣だぞ」ということを「深く」感じた (33)。さらに例として、知識人崔万秋との対話を挙げている。崔万秋が「大世界」などの娯楽場所に対して批判的であったことから、小田は「新興中華青年の気負いを見て取った」と記している。「支君」を「さういう風に駆り立たせるやうな環境空気はたしかに上海にあるのだ」ということを「痛切に感じ」たのであった (34)。

以上、一般観光客として、あるいは一人の作家としての上海体験を、氏の自作を中心に整理した。上海に行く前には国際状況と中日関係における自分の位置などの問題に対して浅薄な認識しか持っていなかった小田は、上海における様々な現地体験よって、その認識を改めることになったのであった。次章はその小田の認識の変化について論じる。

3.上海体験における認識の変化

田中栄一が「小田嶽夫論」の中で論じたように、小田が杭州時代に目撃した「内戦による民衆の惨状」が、彼を「正義・反骨の精神を刺激し、国家、歴史、運命等の広い認識へといざなった」(35) としたら、上海体験は誘う状態から小田に深く考えさせ、彼の作家人生に大きな影響を与えたとも言えよう。

3.1.中日関係及び自分の位置に関する認識の変化

上海旅行の前年の 1936 年 11 月、小田は『文藝春秋』で「抗日教科書」というテーマの文章を発表した。「日本に対して抱く支那の軍隊、学生、一般民衆の感情の暗流を問題にしたい」と述べ、中国で「意識的、計画的」に実行されている「小学児童に対する排日教育」の恐ろしさを示している。日本政府は「日支親善的工作」に努力するべきだと小田は思った (36)。小田は中国人の排日意識を日本政府の「日支親善的工作」の推進と結びつけており、当時の本質的に不対等な中日関係を捉えることができなかったのである。

上海で中国人民衆の排日気分を体験した。さらに、第一次上海事変に関する新聞記事や体験者の話などを通して小田は間接的に戦争の悲惨さも体験した。戦場跡を見に行き、小田は「日本人墓地へも詣」(37) った。それは単なる一人の作家という職業の身分を超え、日本人というアイデンティティーを持つ行動であり、友好交流を望んだ小田も、現実にある中国と日本の葛藤を無視し切れなかったのであろう。

1937 年 10 月の『新潮』の特集「文学者の見た支那」で、小田は「濁った水」という題目のエッセイを書いた。その中で、中国人との交流について、次のように述べている。

支那人といふ人種は話せば分かる人種のような気もするのだが、今日の日支間の状

態ではその「話」といふのがなかなか簡単に行かないのでもあったらうし、それに第一真に話し合ふ空気ができていないのではてんで「話」にも何もならん。（「濁った水」「文学者の見た支那」『新潮』1937 年 10 月号、p. 29）

「話し合ふ空気ができていない」という言葉を発するのは上海の実体験があるからであろう。小田なりに持っていた願望は「支那人の激しい敵愾心」(38) で瓦解し始めた。つまり、国家公務員という公的な身分ではなく一般観光客という私的身分に変わっても、日本人という生まれつきの身分であることで、中国人の民衆との理想的な友好交流を達成するのは難しいことであると小田は認識したのである。

この認識に基づき、小田は中国と日本の間における自分の作家としての位置、「自分の作家としての生き方の問題」(39) についても改めて考え始めた。1937 年 11 月、盧溝橋事件の 4 ヶ月後、第二次上海事変の 3 ヶ月後に出版されたエッセイ集『支那人・文化・風景』の「序」で、次のように述べている。

十年以前一官吏として支那に三年余在住していた際の経験と、今春約 1 ヶ月間上海に逗留した際の見聞と、折にふれて親しんだ現代支那文学に就いての些かの知識などからこの書は出来上がつている。私は謂うところの支那通でもなければ支那研究家とも言われ得ない。ただ傍人より支那にいくらか余計関心をもつ一作家であるに過ぎない。けれども私はこの拙著を一人でも多くの人に読まれることを切願する。言ふ心は、支那の現実を知ること少ない人がそれを知る上に些少でも助けになれば幸であると為すに外ならない。書中のエッセエ類に著者の主張らしい何物もないことも、もともと私自身知らんとすることに重きを置いたためであつた。（「序」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年）

この頃小田は、自分の単なる「支那にいくらか余計関心をもつ一作家」であるという身分と、「主張らしい何物もない」ことを強調し、「支那の現実を知ること少ない人がそれを知る上に些少でも助けになれば幸である」と主張している。この文章では、三つの点に注目する必要がある。一つは、小田の身分意識である。支那に関心を持つ「作家」という、「公的」なことを避ける身分意識は、上海から帰国後に書いたエッセイ「一層芸術的」にも表れている。

現代の日本が大きな変革期に立っているといふは恐らく間違いでないであらう。かういふ時には経世的な大文章が続々と文学界にも現はれるであらうし、さうあるのが当然だとも思ふ。が人間の小さな生命をひそやかにつづつた記録もさういふ時代だからと言つて蹂躙されるべきではない。それが無惨に踏みにじられるやうだつたら、その

時こそ僕等は敢然として匹夫の志を振つて起たねばならない。(「一層芸術的」『文学生活』1937 年 4 月号)

国家などの公的な視点で「経世的な大文章」を書くことではなく、単なる一人の作家として一人一人の個人の生命に注目して描くことの重要性を強調し、自分の志向を表している。

二点目は、「支那の現実」を日本人に伝えたいということである。30 年代の日本メディア界は同時代の中国の文学者や思想家などを紹介し、特に「大手総合雑誌が中国に関する特集号を編集し、断続的に中国の文化的な動向を日本に伝えていた」のであった[(40)]。しかし、小田が体験した現実、想像以上に濃厚な排日気分や知識人の「意気情熱」と「反日救国」といったことはあまり知られていなかった。「抗日教科書」などのエッセイですでに日本側のメディアの不作為という問題点を指摘していた小田は、自分が見てきた中国を日本人に伝えるという、中国と深い因縁をもつ作家としての責任感を認識したとも言えよう。

三点目は、「序」の「主張らしい何物もな」く、ただ自分が知りたかったことを書いた、という主張である。これを言い換えると、自分は専門家ではないから書いたことの正否を問わない、自分は「主張」がないから中日間における自分の立場をはっきりしなくても良いというメッセージを暗示している。小田が「支那通」や「支那研究家」という身分を避けることと、「主張」がないと強調することは一種の責任回避とも見られるが、それは政治やイデオロギーから筆を運ばないという小田の意志を表しているとも考えられる。

以上のことから、中国の現実、中日関係及び自分の位置などの問題に対しての浅薄な認識は上海体験によって払拭され、そうした事柄に関する認識が深まったと言えるであろう。小田は中日間の現実及び戦争による敵対的関係を実感し、中日友好という望みを達成することは困難であると認識した。それと同時に、中国と深い因縁を持つ作家としての責任感も感じた。しかし、中日間の衝突は避けられない現実であるため、小田は国籍を問わず、時局下一人一人の「小さな生命」を描くという作家の志向を確立した。これが上海体験を通じて小田が獲得した新たな認識と言えよう。

３．２．中国人知識階級の「情熱」への高い評価

前章で述べたように、中国のインテリゲンチャ青年たちが政治で「悲観、絶望の淵へ落し込まれている」と思っていた小田は、中国人知識階級との交流で認識を一新させた。小田は上海という国際都市に生きている人々を評価する時に、「世界のあらゆる国人が思ひ思ひに動いている、茫漠としてまとまりの無い中に」、その「底にしづかに流れている」「新しい支那的感情――知識階級支那人の救国の情熱」[(41)]を指摘している。中国人知識階級の情熱に感心したのである。では、具体的に中国人知識階級のどのような「情熱」を認識して高く評価したのであろうか。

まず、小田は上海で中国のインテリゲンチャ青年たちの「健康性」を認識した。

支那のインテリゲンチャの健康性に帰することになるのであろうか、支那のインテリゲンチャ青年は国家状態、社会状態の関係上日本の青年などとは比較にならない程欲求の精神に燃え、随つて或る程度の文学関心はすべてのインテリゲンチャ青年の持つところのもののやうに見受けられる。（「最近支那芸術界の報告」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 196）

また、「健康性」を表す、「不健康な享楽場のことなどは申し合はせでもしたやうに一切口の端にも上さない」(42) ということも、小田の記憶に刻印された。特に、小田が見た上海は「国境を全然超越した、嘘のやうになごやかに楽しい」都市であり、人を堕落させる娯楽施設も沢山あるところである。しかし、このような環境の中でも、中国人の青年は退廃に落ち込まないことに感嘆した (43)。さらに、小田は対比的に日本の青年のことを思い出した。

それらの意気に燃えた青年たちに会ふこと度重なるにつれ、僕にしばしば海を越えた東京のネオンに彩られた銀座の夜の街頭が思ひ浮かび、しかもその華やかな街が妙にはかなくもの悲しかつたのである。そして吁、その光りの陰にうごめく青年群の幻が何と悲しい骸骨の踊りに映ったことであらう。（「新興支那の作家・知識階級人」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 48）

中国のインテリゲンチャ青年と比べると、東京の退廃的な日本人青年の姿は「悲しい骸骨の踊り」のように見えた。このように小田は中国人青年の情熱に基づく「健康性」を高く評価している。

一方、情熱の動因である「反日救国」精神も上海体験における新しい認識である。小田はこの動因と中国のインテリゲンチャの関係を次のように記している。

支那インテリゲンチャが一方に於いてその左翼思想的な言論や運動を苛酷に抑圧されても尚一方に救国（帝国主義打倒）的情熱や、西欧的な科学的思想の移入に或る程度まで情熱を発揮する余地が残つていることが諒解された。青年は常に彼等の情熱を十分に発揮しようと焦燥してゐるのは事実であり、（中略）、今日では、政治形態が彼等の意に充たないからと言つて直ちに彼等が悲観、絶望に呻吟しているとは見られないことを如上の理由から可なり明白に観取されるのである。（「新興支那の作家・知識階級人」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、pp. 52〜53）

中国のインテリゲンチャの情熱とその動因を分析した。このようなインテリゲンチャが「常に支那国家の強化発展の後盾」となり、彼等の情熱が「無形に国家の支へ」となってい

ると評価した[44]。また、中国人知識階級により文化の面で「現時の支那が五千年歴史の最も顕著な頁を綴っている」ことは事実だと結論づけている[45]。

以上は小田の知識階級全体に関する認識であるが、魯迅に対する認識も変化したように思われる。第 1 章で示したように、小田は亡くなった魯迅を記念するための本の翻訳に努め、上海訪問の目的の一つは魯迅夫人に翻訳に関する問題を解決してもらうことであった。後に執筆した『魯迅伝』の「序章」[46] で、この上海訪問について記している。上海にいる時に小田は魯迅の家を訪問し、鹿地亘などの魯迅の知り合いの話を聞くことができたが、そのような体験を通して魯迅への認識も深まったのではないだろうか。

終わりに

本稿は小田嶽夫の 1937 年 3 月～4 月の上海体験を分析し、上海体験における認識の変化を明らかにした。小田は公務員から一般民衆・作家になり、中日間の友好交流という素朴な願望を抱いて、中日戦争が本格的に始まる直前の 1937 年の上海で様々な体験をした。小田は第一次上海事変に関する情報を集め、戦争の悲惨さを間接的に体験した。さらに、中国人の濃厚な抗日・排日気分を体験した結果、身分を転換しても友好的な交流が困難であることを認識した。これにより、小田は中国の現実及び中日関係について今まで以上に注視し、深く考察するようになった。また、中国人知識階級の状態を新たに認識し、彼らの「反日救国」の「情熱」に感心した。この時期に「自分の作家としての生き方の問題」についても考えていた。中国と深い因縁を持つ作家としての責任感を感じ、政治やイデオロギーなど公的なものを避け、国籍を問わずに時局下一人一人の生命を描くという作家の志向を確立した。

上海体験によって小田が得たものは、その後の彼の小説に反映されていく。この点については稿を改めて詳しく論じることにするが、本稿の最後に簡単に紹介したい。例えば、1937 年 10 月号の『改造』に発表し、踊り子の鏡子の恋愛事情と、第一次上海事変下上海での市街戦の体験を描いた小説「泥河」には、国家のために燃えている中国人高校生[47]が登場する。また、同年 11 月の『新潮』に発表し、主人公岩村を中心に上海で仕事をする四人の日本人青年の退廃した生活を描いて、その途方にくれた心理を表した小説「さすらひ」の中には、「僕はかういふ租界のやうな自由な空気の中にいて、自由な空気を享楽しているだけでは何も意義はないと思ふな。例へば支那の青年はかういふ租界といふ政府の手の届かない位置を利用してとも角何かをやつている。だが僕等は何をしているんだ」[48]という、小田の中国人知識階級に関する認識が投影された発言がある。

このように、上海での現地体験で得た新たな認識によって、小田は中国の現実、日本の現実及び中日関係について深く考えるようになった。この姿勢は後年にも続き、作家としての小田の基本姿勢になっている。特に「小さな生命」を描くという新たな志向は、後の小田文学の源の一つだとも考えられる。

注：

(1) 戸塚麻子「『大陸新報』連鎖小説にみるグレーゾ――小田嶽夫「黄鳥」を中心に」高綱博文他編『戦時上海のメディア：文化的ポリティクスの視座から』研文出版、2016 年、pp. 68～88.

(2) 小田三月編集の著作一覧表（『小田嶽夫著作目録』青英舎、1985 年）、雑誌記事索引データベース、国立国会図書館デジタルコレクションによる。

(3)『回想の文士たち』冬樹社、1978 年、p. 31. 以下、小田の著作については著者名を省略する。また、本文で作品から引用する際は漢字を適宜現行のものに改める。

(4) 倉橋彌一「同人雑誌に據る人々」『文藝首都』第二巻第十一号、1934 年。

(5)「上海行」「暴風雨前夜」『文学青春群像』南北社、1964 年、p. 211. 以下、『文学青春群像』については、最初に節のタイトル、次にその節が含まれる章のタイトルを示す。

(6)「青春流離」『漂泊の中国作家』現代書房、1965 年、p. 68.

(7)「上海雑感」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 11. 以下、『支那人・文化・風景』については、最初にエッセイのタイトルを示す。

(8)「郭沫若と郁達夫」「暴風雨前夜」『文学青春群像』南北社、1964 年、p. 207.

(9) 同上.

(10)「上海行」「暴風雨前夜」『文学青春群像』南北社、1964 年、p. 211.

(11) 小田三月『小田嶽夫著作目録』（青英舎、1985 年）による。

(12)「抗日教科書」『文藝春秋』14 巻 11 号、1936 年。

(13)「上海雑感」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 15.

(14)「上海通信」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 27.

(15)「磨鏡子」（モチンツ）とは、中国古代の女性同性愛者およびその性愛の方式である。

(16)「上海通信」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 22.

(17)「上海通信」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 25.

(18)「上海日記」『海運』日本海運集会所、1937 年 4 月号、p. 96.

(19) Xiaolan Chen, *Primitive and modern: Two faces of Shanghai in Chinese and Western literature*, Frontiers of Literary Studies in China, 2007, p. 544.

(20)「上海雑感」『支那人・文化・風景』竹村書房、p. 14.

(21)「憶ひ出の上海」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 71.

(22)「人生を作る」『三笠山の月』小沢書房、2000 年、p. 29.

(23) 臼井勝美『満州事変―戦争と外交と』中央公論新社、1974 年、pp. 194～195.

(24)「上海日記」『海運』日本海運集会所、1937 年 4 月号、p. 97.

(25)「上海行」「暴風雨前夜」『文学青春群像』南北社、1964 年、p. 226.

(26)「上海行」「暴風雨前夜」『文学青春群像』南北社、1964 年、p. 225.

(27)『上海的外国人 1842−1949』上海古籍出版社、2003 年、p. 51，p. 152.

(28)「上海行」「暴風雨前夜」『文学青春群像』南北社、1964 年、pp. 207～208.
(29)「新興支那の作家・知識階級人」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、pp. 45～46.
(30)「新興支那の作家・知識階級人」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 46.
(31)「新興支那の作家・知識階級人」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 48.
(32)「支君」に関する内容は「上海日記」と「新興支那の作家・知識階級人」による。
(33)「支那人世界」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 143.
(34)「新興支那の作家・知識階級人」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 48.
(35) 田中栄一「小田嶽夫論」『国文学　解釈と鑑賞』(64)、1999 年、p. 16.
(36)「抗日教科書」『文藝春秋』14 巻 11 号、1936 年、p. 68, p. 70.
(37)「上海日記」『海運』４月号、日本海運集会所、1937 年、p. 97.
(38)「上海通信」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 29.
(39)「「夕景色」へのコメント」『あたたかい夜』人文書院、1940 年、p. 114.
(40)朱琳「近代日本における知識人の中国認識 ―中国文学研究会を中心に―」東北大学（博士論文)、2017 年、p. 23.
(41)「上海雑感」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 15.
(42)「新興支那の作家・知識階級人」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 48.
(43)「新興支那の作家・知識階級人」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 54.
(44)「上海雑感」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 16.
(45)「支那の新文化面」『支那人・文化・風景』竹村書房、1937 年、p. 64.
(46)「序章」『魯迅伝』（筑摩書房、1941 年）による。
(47)「泥河」『泥河』砂子屋書房、1940 年、pp. 132～133.
(48)「さすらひ」『新潮』1937 年 11 月、p. 217.